

京都芸術センター制作支援事業

京都フィロムジカ管弦楽団 第33回定期演奏会

2013年6月16日(日) 午後2時開演 (1:15～ ロビーコンサート)

京都府長岡京記念文化会館

♪曲目♪

チャイコフスキー (1840-1893) / 交響曲第5番ホ短調
Пётр Ильич Чайковский / Симфония № 5

- I. Andante - Allegro con anima
- II. Andante cantabile, con alcuna licenza
- III. Valse. Allegro moderato
- IV. Finale. Andante maestoso - Allegro vivace

—休憩—

ドヴォルジャーク (1841-1904) / 交響曲第5番ヘ長調
Antonín Leopold Dvořák / Symfonie č. 5

- I. Allegro ma non troppo
- II. Andante con moto
- III. Andante con moto, quasi l'istesso tempo - Allegro scherzando
- IV. Finale. Allegro molto

指揮：池田 俊

お客様へのお願い

～ 誰もがより楽しめる音楽会にするために、皆様のご協力をお願いいたします ～

- 携帯電話・アラーム付腕時計など音の出る機器をお持ちの場合は、電源を必ずお切りください。
- 演奏中の私語は固くお断りいたします。
- 客席での飲食、喫煙、写真撮影、許可のない録音・録画は固くお断りいたします。
- 補聴器が異常音を発することがございます。ご使用の方はご注意願います。
- 演奏中の客席へのご入場は固くお断りいたします。
- 「咳エチケット」にご協力ください。咳、くしゃみがこらえられないときは、ハンカチやタオルなどで口と鼻をおおうよう、お願いいたします。なお、演奏中の「のど飴」の使用は、開封の音がかえって周囲のお客様のご迷惑になりますので、ご遠慮願います。
- 演奏者が音を出していなくても音楽が続いている場合がありますので、物音をお立てにならないよう、ご注意ください。

京都フィロムジカ管弦楽団「友の会」会員様ご芳名

松村 里香様	吉田 寛子様	古川 宏様
杉本 幸子様	西坂 壽美子様	竹野 繁也様
安藤 美知穂様	小松 朋美様	河内 尚和様
遠藤 時金様	鈴木 一俊様	森永 千一様
井谷 宏美様	辻 良治様	西村 浩輔様
鎗本 和弘様	西 英子様	宮下 哲様
谷口 佳隆様	浅野 節子様	
吉田 育弘様	金谷 一紀様	

2002年4月に発足しました「友の会」は上記会員の皆様方よりご支援いただいております。(6月現在)
新規会員募集中です。詳しくは裏表紙をご覧ください。

ロビーコンサート

13:15より

～今回のロビーコンサートでは、管楽アンサンブルで演奏する古典舞曲をお届けします～

ファルカッシュ F. /ハンガリー古典舞曲

Fl.高松香陽子 Ob.丸井しずか Cl.関 英子 Fg.石塚有里子 Hr.渡辺 悠

…ファルカッシュ・フェレンクは20世紀ハンガリーの作曲家です。この曲は17世紀のハンガリーの舞曲にもとづいています。20世紀ハンガリーからはファルカッシュのほか、コダーイやバルトーク、リゲティなど偉大な作曲家が出ていますが、その音楽的源流にはこうした古い舞曲があるのでしょうか。

M. プレトリウス / 『フランス風舞曲』より

1. Branle Gay 2. Branle Double 4. Bourree 5. Spagnoletta

Pos.柴田光基、中村三鈴、藤井舞、宮下秀行

…16世紀のドイツで活躍したプレトリウスが作曲した多くの舞曲集の中から、フランス風のを再編纂したものです。軽くて短い曲が多いですがトロンボーンアンサンブルの楽しさが伝われば幸いです。

指揮者

池田 俊 (いけだ しゅん)

兵庫県西宮市生まれ。大阪音楽大学において指揮法を研鑽、トランペットを斉藤広義氏に師事。

卒業後、大阪フィルハーモニー交響楽団からのオファーを受け入団。在団中、ドイツのデトモルト国立音楽大学へ留学。指揮法、室内楽、トランペットを学び、再び大阪フィルに首席奏者として迎えらる。

大阪シュベルマー金管アンサンブルのコンサートにおいて指揮とトランペットを兼ね、[奨励賞] [本賞]を受賞。

1995年、大阪フィルを退団し本格的に指揮活動に入る。

1997年、ブリスベン国際ブラス・フェスティバルに招かれ、クインズランド音楽院でのマスター・クラスでオーケストラに関する演奏法やソロの指導と共にコンクールの審査も務める。

1998年、関西フィルハーモニー管弦楽団と共に『池田俊 指揮者デビュー・コンサート』を開催し、豊かな音楽性を持つ才能ある指揮者！と絶賛され、[神戸っ子]のブルーリボン賞候補に指揮部門でノミネートされる。

2001年、ブルガリア国立室内オーケストラを指揮し好評を得る。

2004年、ブルガリアに渡欧し、第1回ワークショップにおいてブルガリア国立ソフィアフィルを指揮しディプロマを授与。

2009年、ウクライナのキエフ(リーセンコ・ホール)においてウクライナ国立交響楽団を指揮し、スタンディングオベーションを受ける。

また関西フィル、大阪交響楽団、広島交響楽団、奈良フィルハーモニー管弦楽団、エウフォニカ管弦楽団、ウィンドカンパニー管楽オーケストラ等で指揮。近年は大阪市音楽団からも招かれている。

アマチュア分野においては京都フィロムジカ管弦楽団、橿原交響楽団、墨染交響楽団、八尾フィルハーモニー交響楽団、立教大学交響楽団、西宮市吹奏楽団、その他等で客演指揮者として招かれている。

現在はプロ、アマを問わない多彩な指揮活動を行い、特にアマチュアのオーケストラや吹奏楽団などからは演奏向上に力を注いでいる“下町の名指揮者”として評価を受けている。

日本指揮者協会会員、高知大学交響楽団(名誉指揮者)、香芝シティ室内オーケストラ(専任指揮者)、JAPANアカデミー・トランペットアンサンブル指揮者(音楽監督)、奈良教育大学非常勤講師。



印刷のことなら

大地社

〒602-0858

京都市上京区河原町荒神口上ル二筋目東入ル

TEL (075) 231-1727(代)

FAX (075) 256-4604

曲目解説

Tr. : 遠藤 啓輔

チャイコフスキー／交響曲第5番ホ短調

交響曲第5番は人気作曲家チャイコフスキーの作品の中でも、最もよく演奏される交響曲だろう。演奏頻度の上では、最後の交響曲である『悲愴』をはるかに超えている印象を受ける。5番が広く愛される理由はよくわかる。とにかく交響曲として非の打ちようがない。冒頭で示された主題が各楽章に少しずつ形を変えて現れ、全楽章を有機的に結びつける統一感ある構成。暗鬱たる第1楽章から始まり、勝利の雄叫びのようなフィナーレで大団円を迎える劇的で満足感を得られる展開。一見伝統的4楽章構成をとっているように見えて、第1楽章がアレグロ的快活さを敢えて封じた音楽であったり、メヌエットやスケルツォではなくワルツを第3楽章に置いたりするなど、革新的な一面があるのも心憎い。僕も高校時代はおおいに熱狂した。しかし聴き込むにつれて、この完璧さに対してむしろ胡散臭さを感じるようになってきた。同じチャイコフスキーでも『悲愴』には作曲者の嘘偽りない魂の叫びを感じるが、5番はあまりにも模範解答的すぎるように思う。そして、『悲愴』とは異なり、音楽とともに泣けるような共感ができないのだ。チャイコフスキーがパトロンのナデジダ・フォン・メックに書き送った「大げさに飾った色彩があります。人々が本能的に感じるようなこしらえもの的な不誠実さがあります」という5番に対する自己批判は、実に正鵠を射ていると思う。

しかしこの曲は、こしらえものとして完璧であるが故に、演奏者の魂の叫びを聞かせる曲としては最高の作品と言える。そして、僕にとってこの曲は「朝比奈隆が最後に指揮した作品」に他ならない。2001年10月24日、愛知県芸術劇場コンサートホールでの大阪フィル名古屋公演。この日、朝比奈は、前半の協奏曲を指揮する時点から、ソリストの小山実稚恵に支えられて舞台に登場するなど異常な健康状態だった。後半の第5交響曲は、第1楽章が終わったところで、楽章間をほとんど休まずに演奏するようにコンサートマスター梅沢和人に指示。最後まで演奏が続けられるかどうか、ギリギリの健康状態だったのだろう。しかし演奏自体は、底力があり激情がほとばしる、朝比奈と大阪フィルの音に相違なかった。

この曲の冒頭は、暗く淋しげな主題を重々しく語る2本のクラリネットが始まる。この「冒頭主題」は各楽章で顔を出し、全曲を有機的に統一する。第1楽章はアンダンテの序奏で始まり、主部はアレグロになるが、テンポを緩める指示が頻出するので、スピード感よりも広がりを感じる。最後の演奏会で朝比奈は、嵐のように激しくテンポを動かし、怒涛のような激情の放出をした。この楽章を聴くといつも、朝比奈の長い腕が大きくしなるたびに音楽が慟哭していたのを思い出す。楽章の最後は地獄の深淵を覗き込むような不気味な音響となる。

第2楽章は包容力ある男声合唱のような低弦の序奏に導かれて、ホルンが夢見るような名旋律を吹く。朝比奈最後の演奏会でソロを務めた池田重一の静謐な演奏は、声も涙も出さずに泣いているようだった。もちろん、この旋律のスタイルに唯一の正解はない。一期一会の演奏会に思いのたけをぶつけて演奏するホルン奏者たちの音楽、それぞれに魅力がある。その後も甘美な旋律たちが歌い継がれるが、クライマックスでは「冒頭主題」がフル・オーケストラで威圧的に演奏され、越えられない壁のようにそそり立つ。が、その恐ろしい場面が劇的に断絶された後、甘美な音楽が再帰する。最後は、2本のクラリネットが静かに現れ、幻のようにおぼろげな上昇音型を吹く。夢の続きのように美しい場面だが、「2本のクラリネット」は「冒頭主題」を吹いた楽器であることを思い出すと、暗澹たる第1楽章の影がよぎる。

第3楽章は「ワルツ (Valse)」と題されている。交響曲の定石では第3楽章にはメヌエットかスケルツォを置くものだが、チャイコフスキーは意表を突いた。とは言っても、ワルツもメヌエットも同じ3拍子の舞曲なので

厳密な定義分けは難しい。僕が感じている印象としては、ワルツには旋律を美しく流す曲が多いのに対し、メヌエットの方はリズムの躍動感が魅力的な曲が多い、という気がする。スケルツォは、メヌエットのリズムの魅力をさらに激しく楽しくしたもの、と言えようか。そしてチャイコフスキーは、スケルツォ的な激しいリズムの遊びよりも、ワルツ的な旋律の美しさを得意としていたように思う。ロシア音楽はワルツと相性がいいのだろうか、チャイコフスキーの後裔と言えるソヴィエトの作曲家たちも、ハチャトリアンやショスタコーヴィチのように独創的なワルツを書いている。これらソヴィエトの作曲家たちのワルツは典雅さの背後に不安に満ちた表情が隠されているのが魅力的だが、チャイコフスキーによるこの楽章は、そうしたソヴィエトのワルツの源流となるワルツの傑作と言えよう。なお、この楽章でも最後に、「冒頭主題」がまるで亡霊のように立ち現れる。この部分、ベルリオーズ『幻想交響曲』の、ワルツの雑踏の中で遠くに恋人の姿を見出す場面がヒントになっているような気がする。

第4楽章ではこの「冒頭主題」が、逞しく力強い旋律に変貌して登場する。この堂々たる序奏部分が静まると、劇的な盛り上がりによって荒々しい主部に入る。熱狂的な中にもほの暗い悲壯感をたたえた音楽は、ロシアの民族舞踏を思わせる。曲の終結部では「冒頭主題」が勝利の凱歌のように姿を変えて高らかに演奏され、最後にはこの音型がさらに管楽器のファンファーレに変容して壮麗な中に全曲が閉じられる。

しかし、どれほど感動的にこの曲が終わっても、ここで僕が思い浮かべるのは最後に見た朝比奈の姿だ。日頃公言していた通り立ったまま指揮し通した朝比奈は、ヴェテランのヴァイオリン奏者たちに支えられて指揮台を降りると、楽屋に近い上手(かみて)側の袖へと消えていった。晩年の朝比奈の演奏会は、果てしなく続くカーテンコールが恒例ようになっていた。一回一回それぞれの演奏会に思いのたけをぶつける朝比奈の演奏はまさにライブの醍醐味であり、毎回異なった質の感動を得られる朝比奈の演奏に惹かれて、熱狂的なファンが押しかけていたからだ。しかしこの日はもう朝比奈が出てくることはなかった。

今回我々は、朝比奈の薫陶を受けた指揮者とコンサートミストレスを得て、この朝比奈最後の作品を演奏できることになった。全身全霊をかけて一期一会の演奏会を作り上げるという、朝比奈が最後まで実践したライブ演奏の醍醐味を、僕たちも継承したい。

ドヴォジャーク／交響曲第5番へ長調

Dvořák の交響曲の表記はちょっと紛らわしい。まず作曲者の名前。「ドボルザーク」「ドヴォルジャーク(今回、チラシ等ではこの表記を使用)」「ドヴォルジャック」など様々にカナカナ表記されるが、原語(チェコ語)読みと比較的近いのは「ドヴォジャーク」だそうだ。ニューグローヴ音楽大事典(講談社)でも「ドヴォジャーク」と表記されており、今後「ドヴォジャーク」が市民権を得ていく可能性があるので、ここでは「ドヴォジャーク」と表記したい。次に番号。ドヴォジャークの交響曲は当初、出版順に番号が付けられていたが、現在では作曲順の番号が一般化している。本日演奏するへ長調交響曲は、現在では「5番」が定着しているが、最初は「3番」として出版された。逆に、最初に「5番」として出版されたのは『新世界より』(もちろん、現在では9番として親しまれている)。そのため、音楽の知識が豊富な人ほど「今日フィロムジカが演奏するのは『新世界より』なのだろうか?」との疑念を持っている可能性がある。今から演奏するのは、ドヴォジャーク最後の交響曲『新世界より』ではなく、彼の若き日の意欲作・へ長調交響曲である、ということをはっきり示しておきたい。

ドヴォジャークがこの第5番へ長調を完成したのは1875年、まだ34歳の時だ。これは相当に凄いことである。8つ年上の大作曲家でドヴォジャークの良き理解者となったブラームスが第1交響曲を完成したのは1876年。かのブラームスが最初の交響曲を完成させんと呻吟していた時、若いドヴォジャークは既に5曲の交響

曲を完成させていたのだ。しかもこの第5交響曲、伝統的な交響曲の定石に則りながらも、後述するように斬新な独自性も取り入れた意欲作だ。そして何より、田園情緒にあふれた美しい音楽で、交響曲史上でも独特な輝きを放っている。若くしてこのような交響曲を書いたドヴォジャークは、チェコの風光明媚な農村で生まれた。この地は音楽好きの領主のおかげで音楽が盛んな土地柄であり、民族舞踏や教会音楽などが溢れていた。こうした環境が早熟な作曲家を生んだのであろう。

第1楽章は冒頭、へ調の穏やかで広がりのある和音から始まる。この曲の主調であるへ長調はまさに農村の作曲家ドヴォジャークを象徴する調といえよう。へ長調の交響曲といえば、誰もが思い浮かべるのがベートーベンの『田園交響曲』だ。田園交響曲と同じ調性を選ぶことで、ドヴォジャークは愛する故郷の田園風景を描こうとしたのだろう。このへ調の和声の中でクラリネットが爽やかに歌う。クラリネットは牧童が吹く笛・シャリヨモーを彷彿とさせる楽器であり、やはり農村風景を思わせる。この爽やかな序奏部分は柔らかな弱音のまま進行し、弦の分散和音でヴェールがかけられる。まるで朝もやの中にいるようだ。ドヴォジャークは早寝早起きを励行する朝型の人間だったそうだが、これはまさに朝の音楽だ。この穏やかな序奏が急速に躍動感を増していき、生命力あふれる第1主題になる。第2主題は再び柔らかな音楽となるが、時折オルガンの大音響を思わせるフル・オーケストラの和音が撃ち込まれ慄然とさせられる。ドヴォジャークは青年時代にオルガン学校で音楽を学んだが、そうしたオルガニスト的な美意識が現れているのかもしれない。終盤は、冒頭の主題が高らかに歌われるが、にぎやかなまま終わるのではなく、穏やかな農村風景の中へと帰っていくかのように静かに消えていくという、斬新な終わり方をする。

アンダンテの**第2楽章**はゆったりとした中にも動きがある。冒頭、チェロが憂いに満ちた主題を演奏する。スラヴの民族色豊かなドヴォジャークらしい歌だ。中間部は、明朗で生き活きとした音楽に変わるが、厳格な伴奏音型が聖堂の中にいるかのような肅然とした雰囲気を出す。陽気な日常の中に篤い信仰が根付いていた農村の生活感が表れているように感じる。後半は、冒頭の憂いに満ちた旋律が再現されるが、神の声を代弁する楽器・トロンボーンのソロがさりげなく加えられるなど、宗教的な色彩を強めている。

第3楽章はスケルツォだが、第2楽章の雰囲気を引き継いだ穏やかな序奏を持つという異色の構成をとり、第2楽章との一体感がある。これによって、伝統的な4楽章形式をとりながらも、第1楽章・中間二楽章・フィナーレという3部形式的な外観を見せる、独創的な構成となっている。スケルツォ主部は田舎人の陽気なダンスを思わせる、楽しく激しい音楽。この楽章にだけトライアングルが使われ、にぎやかな輝きを添える。対して中間部は、穏やかで優雅な舞曲。クライマックスでは金管も加わった粗野な力強さを見せる。激しくにぎやかなスケルツォ主部が再現され、小気味よく閉じられる。

第4楽章は荒々しい第1主題が低弦で豪快に演奏され攻撃的に始まる。第7交響曲やチェロ協奏曲を愛する人にとっては、「これぞドヴォジャークだ！」と納得できる主題であろう。対して第2主題は、穏やかな中に滑稽さも垣間見られる愛らしい旋律。ドヴォジャークの肖像写真は一見するとイカツク見えるが、よくよく見るとクリっとした目や丸っこい鼻が意外に愛らしい。そうした愛すべき作曲家・ドヴォジャークのイメージにピッタリな主題だ。また、ドヴォジャークはかなり斬新な和声を使う作曲家だが、特にこの楽章では不協和音が効果的に使われている。まだ無名な作曲家にすぎなかった時代にこのような思い切った作曲をすることに驚かされる一方、青年作曲家ならではの大胆さとも思われる。終盤には暗澹たる音楽が挿入され、この箇所のみで使用されるバス・クラリネットが暗闇をはいずりまわるように不気味にうめく。ドイツなど周辺強国からのプレッシャーや宗教戦争に苦しみ続けたチェコの歴史に思いを馳せているのだろうか。しかし最後は、豪快さと滑稽さがあいまった高揚感が戻り、自然の輝きを思わせるのびやかなへ長調の和音に回帰して結ばれる。

京都フィロムジカ管弦楽団

Philomusica Orchester Kyoto

Violino	Viola	Flauti	Corni	顧問
板倉 真弓	渡邊 泰里	青柳 隆大	北山 絵里	和田 之宏
小幡 拓也	上田 秀樹・	鳥山 梓	黒田 直樹JAMES	
新庄 元子	高原 友洋・	御園生 香	長岡 武志	団長
中居 楓子	古田 直道・	山口 佳美	真浜 将吾	長岡 武志
森 亜紀	吉川 昌毅・	高松 香陽子・	山影 つぐみ	
八木 愉希絵	池側 将司※	(Piccolo)	渡辺 悠	事務
渡辺 達之輔	久保 将哉※	間嶋 美波※		西村 浩
加藤 百菜・	菅澤 穂高※		Trombe	
木村 誠志・		Oboi	遠藤 啓輔	
田村 うらら・	Violoncello	大王 恵里子	北山 武志	・ : 団友
辻 知里・	多田 進	丸井 しずか		※ : 客演奏者
内藤 佐紀・	松浦 由香		Tromboni	
西田 賢仁・	奥田 悠・	Clarineti	中村 三鈴	
西村 祐司・	小野 健太郎・	黒田 菜穂子	宮下 秀行	
宮宇地 秀和・	秦野 貴生・	関 英子	柴田 光基・	
安井 信貴・	松浦 悟子・	坂牧 隆司・		
安江 絵美子・	岡野 正義※	(Clarinetto basso)	Trombone basso	
安原 由克子・	高村 誠※		藤井 舞	
吉川 正剛・		Fagotti		
渡邊 隆寿・	Contrabasso	石塚 有里子	Tuba	
内田 佳子※	茂原 尚樹	桃川 大毅※	佐藤 義彦・	
栗原 柁子※	田中 郁太郎			
	鳥山 拓		Timpani	
	中平 明江		榎井 涉※	
	藤井 輝之			
	丸山 拓史・		Triangolo	
	後藤 志帆※		高村 未央・	

客演コンサートミストレス・弦トレーナー

栗原 柁子

相愛女子大学(現・相愛大学)音楽学部器楽科弦専攻卒業。これまでに西田秀雄、東儀祐二、鷺見三郎の各氏に師事。大阪フィルハーモニー交響楽団に入団。退団後は大阪フィル、京都市交響楽団、名古屋フィルハーモニー、日本フィルハーモニーの関西公演などにエキストラ出演。平成12年から10年間、アマチュアオーケストラの大阪ハイドンアンサンブルのコンサートミストレスを務める。その後、演奏の傍ら後進の指導にも携わる。

弦トレーナー

岩井 英樹

名古屋芸術大学卒業。ヴァイオラを西岡正臣、ウルリッヒ・コッホ、ジークフリート・ヒュアリンガーの各氏に師事。現在、大阪フィルハーモニー交響楽団ヴァイオラ奏者。

管トレーナー

山崎 雅夫

京都大学卒業。現在、京都大学交響楽団金管トレーナー。トランペットをC. マクベス、A. ハーゼス、M. アンドレの各氏に師事。

京都フィロムジカ管弦楽団からのお知らせ

♪第34回定期演奏会♪

2013年12月22日(日) 八幡市文化センター
ショスタコーヴィチ/ロシアとキルギスの主題による序曲
リスト/交響詩『レ・プレリュード(前奏曲)』
貴志 康一/交響曲『佛陀』 (予定)

♪新入団員随時募集中♪

～私たちと一緒に演奏しませんか? まずはお気軽に見学にお越しください。団員一同、お待ちしております。～
私たち京都フィロムジカ管弦楽団は、近畿のみならず全国各地に在住する団員が週に一度京都に集まり、力を合わせて活動しています。定期演奏会だけでなく、アンサンブルなども楽しんでいます。第36回定期演奏会(2014年度・冬期)ではショスタコーヴィチの大作「交響曲第12番」の演奏を目指しており、それに向けて団員を増強しています。「一緒に演奏したい!」という皆様のご参加をお待ちしています。

<募集パート>

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ (弦楽器急募!!)
オーボエ・ファゴット・トランペット

〔参加資格〕 練習に出席できること。年齢制限はありません。学生の参加も歓迎します。

〔練習日時〕 毎週日曜日(午後1時～午後5時) 春と秋に練習合宿(大津市内。合宿費は10,000円程度)

〔練習場所〕 京都芸術センター、河原町丸太町・荒神口周辺など京都市内各所のほか、大津市など

〔諸費用〕 活動費:3,000円/月 演奏会参加費:20,000～30,000円(学生・初参加の方には割引あり)

入団・見学に関するお問い合わせ先 E-mail: recruit@kyotophilo.com

♪「友の会」会員随時募集中♪

フィロムジカの活動を応援して下さる方を募集しています

- 【年会費】 1口 1,000円
【期間】 ご入会いただいた月より1年間
【特典】 1. 期間内の定期演奏会に、1口につき1名様を無料ご招待
2. その他演奏活動のご案内
3. 定期演奏会プログラムへのご芳名の掲載

お申込み・入会に関するお問合せ Tel&Fax 075-605-0123 (西村) E-mail: tomo@kyotophilo.com

京都フィロムジカ管弦楽団ホームページ

<http://www.kyotophilo.com/>

過去の演奏曲も紹介しております。是非一度ご覧ください。